

# 海 (かいし) 市 No.7

## ● 詩

02 横山 仁 生活の柄 3

04 前田 勉 N通りで

## ● エッセイ

08 片津 森 残雪の山の謎解き

11 佐藤ただし 水田とツバメ (5)

14 横山 仁 雑記 (7)

## 生活の柄 3

— yesterday's papers —\*

横山 仁

床にスーパールのチラシをひろげ

熱心にみている

それから

おもむろに 新聞をながめる

老母の新聞では

ジャパンハンドラーズの下請けたちが

トランプ米大統領をたたいている

(あしたのゴミの日は 空き缶だな)

もう ごみ収集車（塵芥車）は回収済みだ

老母の

時間は

おくられている

\*ローリング・ストーンズの歌を借用

## N通りで

前田 勉

小さな下り坂があるN通り

まだ早い夕刻の灯りが

ビルの窓硝子に程よく映しこまれて

西側の壁面が

モザイク模様の夕陽になっている

横断歩道を渡り

そのゆるやかな坂を下りて行くと

ショーウインドウの前で

髪の毛をいじっている女を

こちらへ歩いてくる男が

さりげなく盗み見ている

男の後ろを歩く老婆が

そのしぐさに気付いて

同じように

女へ目をやった

かつて この通りには気弱で時間に飢えた自意識過剰

な男たちや気丈で言葉に飢えた自信過度な女たちがい

た オープンカフェでレスカを飲みながら本を読み

ぎこちない口調で背伸びした世界を語り

歩いてゆく人たちを横目で追っていた

美しい時代

と思うこと

と

虚しい記憶

との

隔たり

私には

女も

男も

老婆も

見えていた

しっかりと見ていたが

すれ違うとき

男も

老婆も

私を見ることはなく

女は

もう

通りにはいない

やがて

女が立ち止まっていたあたり

ショーウインドウの前を

ゆつくりと通過しながら

さりげなく

そこに映る自分の姿を確認する

しかし

列をなし流れる車の

テールランプの揺れが反射して

私の姿は

飽和する時間に弾かれて

歪み

屈折し

消されて

そこに

ない

## 残雪の山の謎解き

片津 森

赤倉の鳥居を過ぎてから思ったより深い雪で車が  
進めず、途中に駐車して登山口へ向かった。十時出発。  
雪解けの水が多く、沢の流れの右に左にと渡り返しな  
がら登る。雪庇が沢の端に被さっている。誰かの足跡  
があつたので、その跡をたどる。十時四十分、沢はも  
う雪の下に隠れてしまっている。この雪溪の左斜面を  
登ったが、かなり急だ。

この山には一昨年夏に来たことがあつた。その記  
憶と地図と周りの様子をみながら、尾根へ向かう路を  
探したが見当たらず、斑状になつた残雪ややぶを越え  
る。ストックを使つたり、木につかまったりしながら、  
ようやく尾根に出る。十一時過ぎ、日の当たる小さな  
尾根をしばらく行くと、さつき途切れた足跡に出会つ

た。それは吹き溜まつた雪上に再び点々と続き、やが  
て左に向かつていた。下山の時のため、この地点を忘  
れないようにしなければ。風が出てきたので雨具兼防  
寒具着用。右上に稜線が見え、その隣にようやく雪か  
ら露出した山頂部が見えた。

ヤセツル尾根に入った辺りでカウベルを鳴らして  
男が下山してきた。すれ違ふと、少ししてスポーティ  
な装いの女性が下りてきた。履いているのは登山靴で  
はなく明るい色のゴム長だった。その二人が来た方に  
登っていくと、やがて足跡は正面のササ帯の中へ突っ  
込んでいく。そこを突き抜ければ峰越コースに合流し  
た路が右上へ、山頂へと向かつているはずだ。このサ  
サやぶにはかなり邪魔されたが、数分もがいた末によ  
うやく抜け出して路に出ることができた。振り返ると、  
薄青い空の下に遠く秋田駒ヶ岳が見えた。その手前右  
にあるのが和賀岳だろう。

前方に山頂小屋が見えた。この辺りになると丈の  
低いササが春の風にふるえている。最後のひと登りを  
終えて山頂に着いた。標高一〇五九・九メートル。午  
後一時過ぎだった。山頂広場には柔らかな日があつた



ていた。西の眼下に広がる仙北平野は、まだ薄茶の中に眠っているようだった。

昼飯を終えて一時三十分下山開始。間もなく男が一人登ってきた。サングラスをかけていた。先ほど来た路を下ったが、ヤセツル尾根手前の開けた斜面で、緩んだアイゼンの紐を結びなおしていると、さっきのサングラスの男がもう後ろから下りてくるのが見えた。間もなく追いつかれて一緒に下り、その後の下山は彼と同行することになった。

上で昼飯を食べたのか聞くと、簡単に済ませたという。四十歳前後に見えた。四月から大曲に単身赴任したのだそうだ。登りの途中、七、八カ所で赤いテープを木の枝に巻いてきたといい、そのテープを下山時に枝から外す。その慣れた手つきからしてベテランのように見えた。慣れない山で路がみえない時にこの赤い目印は有効だといった。確かに、夏路から外れていたり、雪面に残ったトレースもない場合は方向を見失うおそれがある。それを避けるために、自分が来たルートを残す道標代わりの赤テープなのだった。自分がそんなことに無知なまま登ってきたことを知らされた。

雪溪に下る前の尾根までそんなふうには彼が先導したが、時に立ち止まって、山登りをはじめて二、三年で、夏に一度しか来たことのない山によく来るなあ、と私の無鉄砲さに呆れている口ぶりだった。その一方で、彼自身、上端がようやく踝に届くような浅い靴を履いてきたことやアイゼンを持参しなかったことを反省している様子だった。

私が、ヤセツル尾根で下山途中の女性とすれ違ったという、彼は不思議そうな顔をした。なぜなら、彼が今日すれ違ったのはカウベルの男以外にいなかったからだ。私にしても登りの時にたどったのは一人分の足跡で、それは彼の話からしてカウベルの男のものだと思われた。では、あの女性はヤセツル尾根を過ぎてからどこへ消えたのか。

今朝のことに記憶を巻き戻す。私が車を置いて登山口に向かう途中で軽自動車から下りた普段着の女性がいたが、何の用があつてあそこにいたのだろうか。その女性がゴム長と同一人物で、あれから登り始めたのだとすれば、私は登りで誰にも追い越されてはいないから、女性は別のコースを通り、私よりかなり早く山頂

に着いた後、下山途中のヤセツル尾根で私とすれ違ったということになる。それは驚異的なペースだ。もうひとつ、カウベルの男はどこに車を置いたのだろうか。車に頼らなくてもいいほどこの山の近隣に住む人なのだろうか。

そんな話をし、行き詰まった推理を持って余しながら登山口に着いた。別れ際に、一緒に下って来れてよかったと彼に挨拶をして車に戻った。午後三時半だった。今日はちよつと冒険だったが勉強にもなった。今朝の軽自動車はなかった。

山日記（平成十四年四月）から

\*

数年後、手帳をめくって、あの日のゴム長の女性の行方について振り返ることがあった。

あの日、私と同行者は、登山ガイドに載っている無雪期のコースを常に念頭に置いて往復したが、それとは別に、地元の常連が残雪期にのみ使っている登り口と、ヤセツル尾根の手前とを結ぶバイパスのようなコースがあるのではないか。雪が消えればなくなっ

しまう道。ゴム長の女性はその残雪期のコースの方を往復した。そのことを知る由もない同行者も私も、ゴム長の跡が分かれた地点に気がつかなかった……そんなことだったのではないか。たとえば地形図上にヤセツル尾根から北西方向に延びる尾根がある。この尾根なんかなんとだべ。女性はこの尾根を伝う雪道を踏んで登り、下っていったのではねべか。そんな想像をしていた。

## 水田とツバメ（五）

佐藤 ただし

### ・歩くスキー

今年の冬は正月明けの一〇日過ぎからまとまった雪が降り、二階の窓から見える家の屋根や庭は、すっかり雪で覆われ、遠くに広がる水田風景も雪の原となった。

毎日のように降る雪が根雪になってから、天候の荒れていない日を選び、家の周囲をクロカン用のスキーで歩いた。

このスキーは二〇年以上も前に買ったもので、昨年の初め、押し入れから靴を出して足を入れたところ、足首を覆う部分が劣化して、表面の塗料がぼろぼろと剥がれ落ち、長い年月が経過したことを物語っていた。

そもそもこのスキーを購入したのは、歩くスキーの大会に出てみないかと職場の先輩に誘われたためであった。秋田市内の登山用品店でスキーと靴とストックをセットで買ったものだ。前もってスキーを履いて試すこともなく、ワックスも付けずにその大会に出て、三キロを完走したが、ヘトヘトになってしまった記憶がある。

当時は仕事が忙しかったこともあり、それ以来一度も使わずに作業小屋の二階で二十年以上も眠っていた代物だ。いずれはこのスキーを履いて見晴らしの良い雪原を歩いてみたいと思っていたが、ようやくその時がやって来て、今年は七、八回歩いた。

歩くスキーはカンジキと違い、ストックを使って体を前に進めることが出来るので、平地を歩くのには都合がいい。

家の前の道路が除雪されて、雪のない日は、スキーを肩に担いでしばらく歩き、民家を過ぎたあたりで、スキーを靴に装着してから、歩き始める。一〇年以上前にできたバイパス道路を超えてゆくと、沢の田んぼが里山に挟まれて山の奥まで続いている。山際の農道

に沿って歩く。山の標高は、この辺で最も高い国見山で一〇〇メートル程だ。所々に杉が植林されているが雑木も多く、人の手があまり入っていない印象を受ける。だが、冬の日本海から吹く西風を防いでくれるので、この山があるのは有難い。

雪のない季節であれば、軽トラックが走り、犬を連れて散歩をしている人も見かけるが、この季節は車も走れなくなり、散歩をする人も少なくなる。時々、白い猟犬を連れて歩く人を見かけるぐらいだ。

この農道を歩いて行くと「菅沢の堤」という溜池があり、その先は秋田市浜田の梅林園に続く道だ。沢の入り口の地名は「諏訪」と言い、諏訪は「サワ」と同義語であるとネットで知った。

雪に覆われた農道を歩いていると、杉を植林した山の中に、古い農道跡を見つけたので入ってみる。元々は農作業のためによく使われた農道で、私も子供の頃は山の中でよく遊んで通っていたが、二五年ほど前に田んぼの区画整理をした際に、農道が新たに付けられたため、この道は使われなくなった。

子供の頃、この道が夢に出てきたことがあった。木

立の中のこの道をひとり歩いてみると、道幅いっばいに大きな蛾が羽根を広げて道路を塞いでいて、怖くて先に行けなかったという夢だ。夢の中では、道幅は三メートル位だろうか。今は軽トラックが一台、かろうじて通れるほどの道幅で、下草が伸びて雪に覆われ、道は途中で途切れていた。

人が出入りしない山の中は、小枝が藪となつて雪から顔を出し、スキーに引っかけり、前に進むのに往生した。比較的小枝の少ない所をかき分けながら進み、山の中から出てきた。

ひと昔、或いはふた昔前であれば、栢や栗の木などは薪になり、杉の小枝や落ち葉はかまどの焚き付けとして需要があっただろう。杉の木は家の建て替えに無くてはならなかっただろうし、キノコなどの山菜も食料の一つとして必要とされていただろう。今はそうした身近な山から得られるものをあまり生かしていない時代だ。

山の縁を歩いていると、ミソサザイやツグミと出くわすことがある。ミソサザイは小型の野鳥で、冬に見かけることが多い。全身がこげ茶色で黒っぽく見え、

スズメより小さい。以前、義父から話を聞いていた時、ミソサザイのことを、単に「ミソ」と親しみを込めて呼び、家の垣根にもよく来ていたと話していた。

この鳥は道路脇の側溝に隠れたり、目線よりも低い藪から現れたり、活発によく動く。尾羽をピンと立てるのも特徴だ。こうした小柄な野鳥は木の芽などを食べるために忙しく飛び回り、活発なところが好ましい。見ているこちらにも元気をもらえる。

ツグミもよく見かける野鳥だ。家のまわりにもよく来て、隣家の庭木の赤い実を食べている。

一面真っ白な雪面に野ウサギやキツネと思われる足跡が続く。カモシカの足跡もある。

「菅沢」へ向かう道を右に逸れて歩いて行くと、五アール程の広さ一面に葎が生い茂っていた。そこは元々田んぼだったところで、何年かイネや他の作物を作物せずに置いたせいで、葎が生えたものと思われる。

農業に携わる人が減ってくると、こうした沢の奥の田んぼのように、耕作しにくい場所や、収益の出ない山林は人の手が届かなくなる。次第にその地は元の自然に戻ろうとする。そうした現状を知る機会となった。

家を出て二時間も歩くと、そろそろ帰りたくなってくる。帰りは山際の道ではなく、田んぼの中を歩いて帰った。

## 雑記 (7)

横山 仁

どうせん、いろんな意見があっっている。

(引用開始)

◆2017/02/26 (日) いま、飯山一郎は『放知技』  
がメイン

飯山一郎、書きまくり！

「金正男は死んでない！」↓死んだのは「金哲(チョル)」

私の最新の見解は…、金正男は死んでない！！！！！！  
日・韓・ロシア政府・米国CIAは…  
金正男が死んだコトを規定事実にしようとしている…

金正男の入れ墨の写真と、入れ墨のない腹部の写真は  
…

巧妙なスピコン(目くらまし)で…

腹部には入れ墨が見えない、いや薄っすらと見える…

とかなんとか…

金正男の息子がロシア入りか？ という「情報」  
も含め…

結局は、金正男が死んだ！という情報を信じさせる流  
れ。

しかし！！！！！！

北朝鮮と、ロシア当局は…

ひとことも金正男が死んだ！とは言っていない。

死んだのは…、

北朝鮮の『外交官旅券』を所持していた…

「キム・チョル(金哲?)」であることを…

北朝鮮もロシア当局も一貫して言っている。

「金正男(キム・ジョンナム)」ではなく…

死んだのは、「金哲(キム・チョル)」であると。

中国が「金正男の死」に関して沈黙のままなのは…

なぜなのか？ あとで書きます。(記事)

(引用終わり)

また、「LITERA／リテラ 本と雑誌の知を再発見」にあった。

(引用開始)

“金正男暗殺”監視カメラ映像に日本のテレビ局が「数百万円」支払い！しかも不正流出映像の疑いが  
2017.02.21

13日、マレーシアのクアラルンプール空港で金正男氏が暗殺された事件。日本のマスコミはこぞってこれを大きく取り上げ、事件発生から1週間経った現在でも連日トツプ抜いでの報道が続いている。

そんな中、トンデモない情報が飛び込んできました。それは、いま、日本のテレビ局が一斉に流している金正男氏の“暗殺瞬間映像”入手の舞台裏だ。

空港に現れた正男氏の背後から女が両手で目隠しをするように飛びつくシーン、そして、犯行が行われた後、正男氏が空港の職員とともに医務室に行く様子までが映ったこの空港の監視カメラ映像は、まず19日、フジテレビが『Mr.サンデー』で放映。翌日になると、フジ系だけでなく、テレビ朝日系、TBS系のワイドショーやニュースもこぞって放送した。

しかし、この映像、マレーシア当局が公開したものであるのではない。日本のテレビ局が金にあかせて、不正なルートで入手したものだ。あるテレビ局スタッフが舞台裏をこう証言する。

「数日前、現地入りした日本のマスコミ各社に、現地のブローカーから金正男殺害の瞬間の映像があるから買わないかという売り込みがあった。しかも提示された額は500万円という法外なものでした」

500万円とは驚きだが、当初は、各局とも入手に尻込みをしていたという。その金額の高さももちろんだ

が、映像が不正なルートからの流出した可能性があったからだ。

「あの映像は、現地のメディアも手に入れていなかったし、どう考えても、空港職員か警察官がこっそり横流したものですからね。法律に触れる恐れもあるし、下手をしたら、賄賂にもなりかねない。それで、当初は各局とも様子見をしていたんです」（前出・テレビ局スタッフ）

ところが、これにとびついたのがフジテレビだった。複数の情報源によると、フジは、18日頃に問題のVTRをブローカーから入手。そして、前述のように19日に「スクープ」「独占入手」としてこれを報道したのだという。

「フジは言い値に近い金額、数百万円を出したのは確実です。それを見て、他局も『ウチも手に入れろ！』となって、フジの後を追いかけて次々に購入したんです。別ルートの映像もあるみたいですが、それでも

100万円以上の金をはらってると思いますね」（前出・テレビ局関係者）

国内の取材では過剰なくらいコンプライアンスに神経質になっているのに、海外では不正入手の疑いのある映像に数百万円も支払うというのは驚きではないか。

もちろん、マスコミ、報道機関は国民の「知る権利」を代行するために、時として法律ギリギリのグレーゾーンに踏み込むことも必要になる。しかし、今回のケースはそこまでやるような話なのか。

金正男氏暗殺事件は北朝鮮の異様な恐怖体制を浮き彫りにするものだったが、殺された金正男氏は政治的な影響力があったわけでもないし、映像も生々しいというだけでっけっして検証すべき新事実が映っているわけではない。こんなものに数百万円もの大金を支払うなんて、どうかしていると思えない。

いや、問題はこの映像だけではない。日本のマスコ



ミの金正明暗殺事件の過熱ぶりは異常というしかない。ワイドショーは朝も昼も金正明事件一色。テレビ各局は現地クアラ Lumpur に報道局の記者だけでなく、ワイドショーのスタッフやレポーターを大量投入。空港や病院、地元警察周辺は日本のマスコミだらけになっているという。

その一方で、彼らは自分たちの国で起きている不正や問題については何の関心も示さないのだ。重要法案である共謀罪をめぐるデタラメ答弁や、防衛省による南スーダン PKO 日報の隠蔽問題もほとんど批判しないし、安倍首相夫妻の関与が浮上する「学校法人森友学園」への国有地激安払い下げ問題にいたっては、全国放送のワイドショーで一秒たりとも取り上げない。

ようするに、自分たちの国の権力者に尻尾をふって一切の批判を封印する一方で、叩きやすい北朝鮮や韓国の事件を大々的に報道することで、国民の目をどんな真実からそらせてしまっているのだ。

北朝鮮の恐怖独裁体制をしたり顔で解説しているテレビ局だが、実は彼ら自身の本質は“北朝鮮中央テレビ”と大差ない気がするのだが……。

(編集部)

(引用終わり)

アメリカの経済が、war economy (戦争がないと、経済がなりたたない) であるはずと言い続けてきたのは、副島隆彦氏だが、そのためには、なんでもやってきたらしい。それを変えようとしたトランプ大統領も、ネオコンという戦争屋にやられている。

(引用開始)

「櫻井ジャーナル」2017.02.22 より。

モレル元 CIA 副長官が「予言」した通り、ロシアの主要外交官や大統領の顧問が連続して死亡の謎

ロシアの国連大使、ビタリー・チュルキンが2月20

日に急死した。心臓発作だという。聖日が65歳の誕生日だった。チュルキンはシリアへ自ら軍事侵攻しようとするアメリカの前に立ちはだかり、国連で奮闘してきた外交官。ロシア政府でも重要な役割を果たしてきた人物だ。それだけでも話題になるのだが、ロシアの幹部外交官が連続して死亡していることからさまざまな憶測が流れている。

例えば、昨年12月19日にトルコのアンカラでアントレイ・カルロフ駐トルコ大使が美術展覧会場で射殺され、今年1月9日にギリシアのアパートで54歳のアントレイ・マラニン領事が変死、1月26日にはインド駐在のアレキサンダー・カタキン大使が心臓発作で死亡している。

その前、2015年11月5日には、アメリカ支配層が憎悪しているRTを創設、ウラジミール・プーチン露大統領の顧問を務めていたミハイル・レシンがワシントンDCのホテルで死亡している。死亡して約1年後に発表されたアメリカ側の公式発表によると、混戦状態

で転倒、頭部を強打したことが原因だという。誰が体内にエタノールを注入したかはともかく、それが事実ならすぐにわかるだろう。なお、死亡直後、家族は心臓発作だとしていた。

アメリカをはじめとする西側の有カメデアは偽報道のオンパレード。事実を重視、信頼されているが有カメデアから無視されている西側の人びとに発言の機会を与えることでロシアのメデアは信頼度を高めているが、そうした方針の中心にはレシンがいたのだろう。

2016年8月、マイク・モレル元CIA副長官（11年7月1日から9月6日、12年11月9日から13年3月8日の期間は長官代理）はチャーリー・ローズのインタビューでロシア人やイラン人に代償を払わせるべきだと語った。司会者からロシア人とイラン人を殺すという意味かと問われると、その通りだと答え、わからないように、と付け加えている。このモレルは昨年の大統領選でヒラリー・クリントンを支援していた。

これで話題にならない方がおかしい。ロシアとアメリカが逆だったら、大変な騒動になっていることだろう。ネオコン／CIAはロシアに対する直接的な戦争を始めた可能性がある。目を塞いでも事態は進む。

(引用終わり)

金正男暗殺事件(？)は、北朝鮮を悪にしておきたいやつらの仕業らしい。野崎晃市氏はいう(「文殊菩薩」2017-02-21)。

(引用開始)

トランプ政権は北朝鮮との協議を準備中だった

日本の金正男暗殺関連報道では3月にもアメリカが北朝鮮に攻撃を加える計画があったなどと一部で報道されているが、一方でワシントン・ポストはトランプ政権が北朝鮮との協議を準備中だったと報道した。

北朝鮮と米国との協議は半官半民のトラック1.5形式で行われ、米国シンクタンクの全米外交政策委員会(NCAFP)が北朝鮮政府高官をアメリカに招いて開催される予定だったという。実現すれば5年ぶりに米国と北朝鮮との協議が実現することになる。

この計画はトランプ大統領の米朝協議再開への意向を受けた動きであった。トランプ大統領は就任前に北朝鮮との国交回復を目指す意向を表明し、金正恩を米国に招待してハンバーガーをご馳走したいなどと発言していた。

米国に訪問を予定していたのは北朝鮮外務省米国担当女性外交官の崔善姫で、彼女は以前より北朝鮮の核を巡る6カ国協議に出席し米国外交筋によく知られているという。

現在は北朝鮮高官の渡航ビザの発給を国務省に働きかけている段階のようだが、最近の北朝鮮によるミサイル発射や金正男暗殺などにより動きが停滞している模

様である。

19日にワシントン・ポストが米朝協議の計画を報道したことを考えると、金正男がなぜこのタイミングで

暗殺されたのかという疑問の答えが見えてくるような気がする。

(引用終わり)

## あとがき

◆2月末日は晴天となった。寒さに耐えた褒美を天気  
の神様から頂いた気持ちになる。布団を干したり、キャ  
ベツや白菜などの切れ端を畑に作った堆肥場に持って  
行く。近くの雄物川ではハクチョウの鳴き声が賑やか  
で、春の訪れを感じさせる。そろそろ気持ちを切り替  
える頃だ。(T)

◆プリメインアンプがだめになって、ヤフオクで購入  
した。税務署への申告書の数字を計算しながら、聴い  
ていなかったモーツァルト全集(CD 170枚)などを  
きいている。本を囓るな、寝図美。(J)

◆二月某日、陽射しがうれしくて散歩に出かけた。初  
めて通る小路、住宅街の原風景を想起させる石碑や案  
内板、樺の保存樹など初めての“もの”に出会う。当  
面この探索は続きそうだ。(B)

◆15年前の真昼岳登山のメモを文章にした。あの頃も  
今も山には一人で行くことが多い。一人で登ることに  
様々なリスクはあるが、そのリスク故に下山後の満足  
感やその山に対するに親しみが増す。2月、秋田市・  
太平山に向かった人が下山せず捜索隊が出た。この人  
も一人だったようだが、その後どうなったろう。リス  
クが現実のものになったときの家族や周囲のことを思  
うと、向かう気持ちが鈍ることもあるが、行く気持ちの  
方が強くて出かけている。今年も山のシーズンが来る。  
そろそろなまった体を動さない。(K)

「海市」 第7号

2017年3月11日発行

発行 書肆えん

秋田市新屋松美町5-6 横山方